

序文

二〇〇八年三月六日から七日にかけて、ワークショップ「中国伝統文化が現代中国で果たす役割」が開催された。このワークショップは、「哲学としての現代中国」プログラムの二〇〇七年度の活動を締めくくるものであり、UTCPと香港にあるフランスの現代中国研究機関であるCEFC (Centre d'Etudes Françaises sur la Chine Contemporaine) の共催によって実現した。

そのタイトルが示すように、このワークショップは、中国伝統文化が現代中国でどのような役割を果たしているかをめぐるものであった。とくに問題にしたのは、現代中国における儒学復興という現象である。この複雑な現象を読み解くためには、実践と理論の両方からのアプローチが必要である。そのために、報告者にお願したのは次の側面に言及することであった。

- 1 儒学に関する現在の哲学的・政治的・文化的・教育的な言説を分析する。
- 2 近代中国思想史の文脈において、儒学復興の意義を位置づける。
- 3 現代中国において実践的な活動の場での儒学のあり方を考察する。
- 4 中国以外の地域での儒学復興を取り上げ、それを世界的な古典復興の文脈に置き、比較思想的な観点から論じる。

1 に関しては、干春松さん（人民大学）が中国における儒学を論じた諸理論を簡明にまとめた上で、現代儒学の哲学的・政治的な意義に関するマッピングを提供してくれた。そして、ジョエル・トラヴァールさん（EHSS）とセバステイアン・ビリュさん（CEFC）は共同で、現代中国における儒教教化とりわけ児童教育に関する言説を報告し、分析してくれた。この兩人は、ワークショップの後にもう一つの関連論文（安心立命あるいは儒教の宗教的次元）を寄稿されたので、今回あわせて採録した。また、汲喆さん（CNRS）は「国楽」を用いた現在の啓蒙教育の事例として德音の「国楽啓蒙」を紹介し、それが今やあらゆるレベルの教育に浸透している理由について分析した。

2 に関しては、田中有紀さん（UTCP）から、現在の儒教儀礼で用いられている音楽を手掛かりに、やはり「国楽」の問題が提起された。田中さんはその意義を近代中国における西洋音楽受容と対比しながら論じたのである。高柳信夫さん（学習院大学）からは、一九二〇年代の代表的な「儒学復興論者」である梁啓超と梁漱溟の議論の紹介があり、近代中国において西洋文化との関係の中で儒学が再定義されていく過程が明らかにされた。

3 に関しては、大学とは異なる「書院」という儒学教育の場所（中国文化書院）を運営している王守常さん（北京大學）から、自らの教育体験に基づいた議論が提供された。そして、陳壁生さん（人民大学）からは、潮汕東湖村に残る生きた儒学のあり方がフィールドワークに基づいて報告された。

4 に関しては、水口拓寿さん（東京大学）が台北の孔子廟での儀礼改革を歴史的かつ文化人類学的に報告し、国家統治のレジティマシーとの関連を論じた。そして、中島隆博（UTCP）は戦前日本の儒学復興と現今の中国における儒学復興を比較検討した上で、その問題構成の共通性を指摘した。

これらの発表と討議の詳細に関しては、すでに喬志航さん（UTCPC）による丁寧な報告がある（<http://ucpf.c.u-tokyo.ac.jp/blog/2008/04/post-76/>）。本書に採録した各論文を読む前でも、読んだ後でも、参看していただければ幸甚である。

各報告を受けた討議は、予想以上に充実したものになり、時間を忘れるほど白熱したものであった。結論だけを記しておく、儒学復興現象を捉えるのに、保守化や民族主義といった単純な切り口ではその本質に届かないことが明らかになった。必要なことは、歴史的・政治的・哲学的そして文化人類学的なアプローチを同時に組み合わせ、世界的な「クラシカル・ターン」の文脈に置くことである。そのためには、こうした共同研究が不可欠であり、今後のさらなる継続を約束してこのワークショップをひとまず閉じたのである。

なお、このワークショップは実に円滑に運営されたが、それには多くの方々の協力があった。討議の際の通訳を手伝っていただいた、石井剛さん、王前さん、喬志航さんはもとより、裏方として活躍してくれた「哲学としての現代中国」プログラムの井戸美里さんを中心とするPDとRAのみなさんには心より感謝を申し上げたい。また、本書がなるに当たっても、石井剛さん、小野寺史郎さん、小野泰教さん、森川裕貫さん、田中有紀さんの五名の翻訳者の協力があつた。あらためて御礼申し上げます。

二〇〇八年一月二十九日

中島隆博